



Title	受動態の形式を持つ文であるかどうか : Saya baca buku itu. の文の解釈をめぐって
Author(s)	森村, 蕃
Citation	大阪外国語大学論集. 1991, 6, p. 59-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

受動態の形式を持つ文であるかどうか

— Saya baca buku itu. の文の解釈をめぐって —

森 村 蕃

Sekitar Masalah Diatesis Aktif/Pasif dalam Bahasa Indonesia

Shigeru MORIMURA

Bahasa Indonesia sekarang menghadapi berbagai-bagai masalah. Salah satu di antaranya adalah masalah diatesis aktif/pasif. Apakah terdapat diatesis aktif/pasif dalam bahasa Indonesia? Masalah ini menimbulkan berbagai pendapat orang. Ada yang mengakui adanya diatesis aktif/pasif dalam bahasa Indonesia, ada juga yang tidak.

Di dalam makalah ini akan dibahas secara sintaktis bentuk kalimat yang memiliki gabungan kata ganti orang dengan kata kerja transitif tanpa awalan *meN-* seperti *Saya baca* pada kalimat *Saya baca buku itu* atau pada kalimat *Buku itu saya baca*. Menurut pendapat orang yang mengakui adanya diatesis aktif/pasif dalam bahasa Indonesia, kata ganti orang dan kata kerja transitif tanpa awalan *meN-* yang merupakan gabungan tersebut sangat erat pertaliannya sehingga tidak dapat dipisahkan dengan menyisipkan kata apa pun. Tetapi tidak dapat dipastikan bahwa kedua unsur itu erat pertaliannya.

Kalau sebagai kata kerja transitif tanpa awalan *meN-* digunakan kata kerja transitif yang bersifat "boleh dibubuhi dengan awalan *meN-* atau boleh juga tidak", maka kedua unsur itu renggang hubungannya. Dalam kasus ini kata ganti orang berfungsi sebagai subjek, sedangkan kata kerja transitif tanpa awalan *meN-* sebagai predikat. Misalnya, kalau dianalisis secara sintaktis kalimat-kalimat *Saya baca buku itu* dan *Buku itu saya baca*, maka hasilnya adalah sebagai berikut: *saya*...subjek, *baca*...predikat, dan *buku itu*...objek. Jadi, contoh kalimat yang pertama berpola S/P/O, sedangkan yang kedua berpola O/S/P.

はじめに

インドネシア語において能動態、受動態の区別がオランダの学者 A. A. Fokker によって導入されて以来、インドネシア語に能動態と受動態の区別が存在するのかわという問題をめぐってこれまでさまざまな意見が提出されてきた。しかしながら、この問題は未解決のまま今日に至っている。インドネシア語に能動態、受動態という区別を認める立場をとる者と、それを認めない立場をとる者とのあい異なる意見が現存している。本稿の目的は、副題のインドネシア語文における saya のような人称代名詞と baca のような接頭辞の me- がつかない動詞形とを組み合わせた形式を含む文は受動態の形式を持つ文であると考えられるのか、統語論の角度から考察し、私の見解を述べることにある。

本 論

本稿でいう主語、述語、目的語という術語は、概ね伝統文法における概念に従って以下の意味で用いる。主語は「それについて何かを述べる述語の主体を表す一つまたは二つ以上の語」、述語は「主語について何かを述べる一つまたは二つ以上の語」、目的語は「述語の動作・作用の対象を表す一つまたは二つ以上の語」という意味である。

さて、インドネシア語には次の (1)、(2)、(3) の形式の文が現存している。

- (1) Saya membaca buku itu. ……………①
 Anda membaca buku itu. ……………②
 Dia membaca buku itu. ……………③
- (2) Saya baca buku itu. ……………④
 Anda baca buku itu. ……………⑤
 Dia baca buku itu. ……………⑥
- (3) Buku itu saya baca. ……………⑦
 Buku itu Anda baca. ……………⑧
 Buku itu dia baca. ……………⑨

上の (1) の形式の文は、saya<私>、Anda<あなた>、dia<彼(彼女)>のような人称代名詞と membaca<読む>のような接頭辞の me- がつく他動詞が用いられた文である。一方、(2) と (3) の形式の文は、saya baca, Anda baca, dia baca のように人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形 baca とを組み合わせた形式を含んでいる。本稿では、人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形とを組み合わせた形式を含む文、即ち、(2) と (3) の形式の文をとりあげ考察の対象とする。

インドネシア語に能動態、受動態の区別を認める意見によれば、いわゆる生成文法 (Generative

Grammar)の変換 (Transformation)という操作によって (1) の文から (2) (3) の文が派生されるという。^{註(1)}即ち、(1) のような形式の文が能動態の形式を持つ文——核文 (Kernel Sentence)——としてとらえられる。(1) の文の述語には membaca<読む>のような接頭辞の me- がつく他動詞が用いられている。(1) は次のように解釈される。

「私はその本を読んだ。」……………①

「あなたはその本を読んだ。」……………②

「彼 (彼女) はその本を読んだ。」……………③

この (1) の文の目的語 buku itu<その本>が主語の位置におかれ、人称代名詞 saya, Anda, dia と他動詞の membaca から接頭辞の me- をとった形が組み合わされて受動態の形式を持つ文が派生される。(3) の文がそれである。(2) の文は、(3) の文の主語 buku itu が受動態をなす述語の後に置かれた倒置形式の文としてとらえられる。このような (2) (3) の受動態形式を持つとみなされる文は、次のように解釈される。

「私によって読まれた、その本は (その本は私によって読まれた)。」……………④

「あなたによって読まれた、その本は (その本はあなたによって読まれた)。」……………⑤

「彼 (彼女) によって読まれた、その本は (その本は彼 (彼女) によって読まれた)。」……………⑥

「その本は私によって読まれた。」……………⑦

「その本はあなたによって読まれた。」……………⑧

「その本は彼 (彼女) によって読まれた。」……………⑨

(2) (3) の文が (1) の文から派生する受動態形式を持つ文と考える意見では、(2) (3) の文の人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形とを組み合わせた形式は堅い結合関係にあるとみなされ、それらの位置の交代もできなければ、それらの間に他のいかなる要素 (形態素ないし語) も挿入することができないと規定する。つまり、人称代名詞 saya, Anda, dia と接頭辞の me- が落とされた動詞形 baca とは堅い結合関係にあるとみなされ、それらの位置の入れ替えもできなければ、それらの間に他のいかなる要素も挿入することができないという。例えば、sudah<すでに、～し終えた>という語が (2) の文に挿入されれば次の (4) に、(3) の文に挿入されれば (5) になるが、(a) は許容されるのに対して (b) は非文であるとされる。

(4) (a) Sudah saya baca buku itu.

(b) Saya sudah baca buku itu.

(a) Sudah Anda baca buku itu.

(b) Anda sudah baca buku itu.

(a) Sudah dia baca buku itu.

(b) Dia sudah baca buku itu.

(5) (a) Buku itu sudah saya baca.

(b) Buku itu saya sudah baca.

(a) Buku itu sudah Anda baca.

(b) Buku itu Anda sudah baca.

(a) Buku itu sudah dia baca.

(b) Buku itu dia sudah baca.

しかし、社会習慣的な言語の実情はどうであろうか。(2)の形式の文から見てみよう。(2)の形式の文において、人称代名詞と接頭辞の me- が落とされた動詞形との間に他の要素が挿入されることがある。これは、とりわけ informal なスタイルの口語に見られるのである。次例を見よう。

(6) Saya belum dengar berita itu. 註(2)

上の(6)の文は(2)の形式の文であり、人称代名詞は saya<私>、接頭辞の me- がつかない動詞形は dengar<聞く>である。この文において、saya と dengar との間に belum<まだ～していない>という語がはさまれている。これは、saya と dengar が堅く結合しているとは言い切れないことを示している。次例も(2)の形式の文で、人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形との間に他の要素がはさまれている例である(括弧内は後述の引用参考文献の番号とページを示す)。

(7) (a) Acara berikutnya kami akan putarkan lagu-lagu perjuangan. (2 p.6)

(b) Saya ingin tanyakan soal itu. (8 p.24)

(c) Kamu belum tulis juga suratnya ? (11 p.176)

(d) Saya mau kirimkan surat-surat ini ke Amerika. (4 p.223)

(e) …… Saya mau baca surat ini sebentar. (4 p.225)

(f) Wah, saya tidak bisa beli buku itu. …… (4 p.223)

(g) Nyonya mau beli yang ini juga ? (4 p.217)

(h) Apakah saya harus laporkan peristiwa itu kepada polisi ? (5 p.115)

(i) Saya mesti segera kirim teleks ini ke Jakarta karena isinya sangat penting. (5 p.115)

(j) Saya akan antarkan Saudara ke kota Singaraja, …… (5 p.124)

(k) La illa ! Saya belon bayar becak nih. (11 p.5)

(l) Barangkali dia bisa tolong kita. (11 p.6)

(m) Tapi, ya, barangkali saya bisa bicarakan itu dengan bapak saya. (11 p.135)

- (n) Nah itu, Karim, kamu harus betul-betul laksanakan dengan segera apa yang saya mintakan dari kamu. (11 p.149)
- (o) Saya nggak mau sewa mobil itu. (11 p.154)
- (p) Saya nggak mau ajak si Tuti ke pesta besok. (11 p.154)
- (q) Saya nggak mau pakai lemari itu. (11 p.154)
- (r) Kami belum jual mobil itu sebab kami perlukan. (11 p.176)
- (s) Karena tidak ada orang yang bisa menolong, saya harus bersihkan sendiri kamar-kamarnya. (11 p.176)

上例について人称代名詞、接頭辞の me- がつかない動詞形、はさまれている要素の順に列挙すれば次のようになる。

- (a) kami — putarkan — akan
- (b) saya — tanyakan — ingin
- (c) kamu — tulis — belum
- (d) saya — kirimkan — mau
- (e) saya — baca — mau
- (f) saya — beli — tidak bisa
- (g) nyonya — beli — mau
- (h) saya — laporkan — harus
- (i) saya — kirim — mesti segera
- (j) saya — antarkan — akan
- (k) saya — bayar — belum
- (l) dia — tolong — bisa
- (m) saya — bicarakan — bisa
- (n) kamu — laksanakan — harus betul-betul
- (o) saya — sewa — nggak mau
- (p) saya — ajak — nggak mau
- (q) saya — pakai — nggak mau
- (r) kami — jual — belum
- (s) saya — bersihkan — harus

このように (2) の形式の文において人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形との間に他の要素が挿入された形式が存在することにより、人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形は堅い結合関係にあるとは言い切れない。従って、受動態論者の説く規則の普遍性には疑問が残る。社会習慣的な言語事実として前掲 (4) (b) の文も存在するのである。(2) の形式の文は独自の形式を備えた文ではないかと考えなければならない。では、どういう統語構造を持つ

文であろうか。前掲(4)(b)の各文において、人称代名詞 saya, Anda, dia と接頭辞の me- がつかない動詞形 baca との間にはさまれた sudah という語は機能上、baca を修飾する。baca <読む> は本来、接頭辞の me- が付されなくても語としての機能を発揮することが可能であり、各文で他動詞の働きをしている。sudah baca は「すでに読み終えた」という意味で、baca を中心とする内心構造の動詞句を形成している。この動詞句は各文で述語の働きをしており、その主語は人称代名詞である。そして、その目的語が buku itu <その本> である。(4)(b)の各文の統語関係を示せば次の通りである。

Saya sudah baca buku itu.

主語 述語 目的語

「私はその本を読み終えた。」

Anda sudah baca buku itu.

主語 述語 目的語

「あなたはその本を読み終えた。」

Dia sudah baca buku itu.

主語 述語 目的語

「彼(彼女)はその本を読み終えた。」

次に、(4)(a)の各文の統語関係はどうであろうか。(a)の各文も(b)の各文のように主語、述語、目的語から成る基本構造に変わりはない。各文で baca を修飾する sudah が主語である人称代名詞の前に置かれているにすぎない。

ここで、これら(2)の形式では baca のように me- のような接頭辞がつかなくても動詞として用いられる語、つまり、接頭辞が任意的な他動詞性を帯びた語が用いられていることに注意しなければならない。そして、この種の語が用いられる場合、受動態論者が説く規則の普遍性に問題があるのである。インドネシア語の動詞には baca に接頭辞の me- がついた他動詞性を帯びた語 membaca <読む> があり、とりわけ formal なスタイルの言葉に用いられるのに対して、me- のような接頭辞がつかなくても他動詞として用いられる baca <読む> もあって、比較的 informal なスタイルの口語に用いられる。本稿でいう接頭辞が任意的な他動詞性を帯びた語とは、(mem)baca のように接頭辞の me- がついた形はとりわけ formal なスタイルの言葉に用いられるのに対して、接頭辞がつかない形は比較的 informal なスタイルの口語に用いられる種類の他動詞のことである。前掲(6)、(7)(a)~(s)の文の中の dengar <聞く>、putarkan <まわす>、tanyakan <尋ねる>、tulis <書く>、 kirimkan <送る>、 beli <買う>、 laporkan <報告する>、 kirim <送る>、 antarkan <案内する>、 bayar <払う>、 tolong <助ける>、 bicarakan <相談する>、 laksanakan <実行する>、 sewa <借りする>、 ajak <誘う>、 pakai <使う>、 jual <売る>、 bersihkan <掃除する> も baca と同類の語であり、接頭辞が任意的な他動詞性を帯びた語である。そして、(6)、(7)(a)~(s)の各文も(4)(a)(b)の各文と同様、主語、述語、目的語という要素から成る統語の基本構造を示している。(6)は saya

が主語、belum dengar が述語、berita itu が目的語であり、「私はまだそのニュースを聞いていない。」と解釈できる。同様に、(7) (a)~(s) の各文について主語、述語、目的語の順に列挙し、日本語の訳例をつければ次の通りである。

- (a) kami — akan putarkan — lagu-lagu perjuangan
「次のプログラムは、闘争歌をお聞かせします。」
- (b) saya — ingin tanyakan — soal itu
「私はその問題をお尋ねしたい。」
- (c) kamu — belum tulis juga — suratnya
「君はまだ手紙を書いていないのか。」
- (d) saya — mau kirimkan — surat-surat ini
「私はこれらの手紙をアメリカへ送りたい。」
- (e) saya — mau baca — surat ini
「……私はこの手紙をちょっと読んでみたい。」
- (f) saya — tidak bisa beli — buku itu
「わあ、私はその本を買えません。……」
- (g) nyonya — mau beli — yang ini juga
「あなたはこちらも買いますか。」
- (h) saya — harus laporkan — peristiwa itu
「私はその事件を警察に知らさなければなりませんか。」
- (i) saya — mesti kirim — teleks ini
「私はすぐにこのテレックスをジャカルタに送らなければならない。内容がとても重要だから。」
- (j) saya — akan antarkan — Saudara
「私は君をシンガラジャの町へ案内しましょう。……」
- (k) saya — belum bayar — becak nih
「わあ！私はまだこのベチャの料金を払っていない。」
- (l) dia — bisa tolong — kita
「多分、彼は我々を助けることができるであろう。」
- (m) saya — bisa bicarakan — itu
「でも、ね。おそらく私はそのことについて父と相談できるでしょう。」
- (n) kamu — harus betul-betul laksanakan — apa yang saya mintakan dari kamu
「そら、カリム。君は私が頼んだことをすぐに実行しなければならない。」
- (o) saya — nggak mau sewa — mobil itu
「私はその車を借りたくない。」

(p) saya — nggak mau ajak — si Tuti

「私はトゥティちゃんを明日のパーティに誘いたくない。」

(q) saya — nggak mau pakai — lemari itu

「私はその戸棚を使いたくない。」

(r) kami — belum jual — mobil itu

「我々はその自動車が必要なので、まだ売らない。」

(s) saya — harus bersihkan — kamar-kamarnya

「手伝ってくれる人がいないので、私は部屋の掃除を一人でしなければならない。」

前掲(2)の文は、接頭辞が任意的な他動詞 *baca* が *sudah* のような修飾語を欠くだけであるから、その統語構造は人称代名詞 *saya*, *Anda*, *dia* が主語、*baca* が述語、*buku itu* が目的語であるととらえることが可能である。

Saya baca buku itu.

主語 述語 目的語

「私はその本を読んだ。」

Anda baca buku itu.

主語 述語 目的語

「あなたはその本を読んだ。」

Dia baca buku itu.

主語 述語 目的語

「彼(彼女)はその本を読んだ。」

では、前掲(1)の形式の文の統語関係はどうであろうか。(1)の文では、明らかに *membaca* が述語で、その主語が人称代名詞、目的語が *buku itu* である。

Saya membaca buku itu.

主語 述語 目的語

「私はその本を読んだ。」

Anda membaca buku itu.

主語 述語 目的語

「あなたはその本を読んだ。」

Dia membaca buku itu.

主語 述語 目的語

「彼(彼女)はその本を読んだ。」

従って、(1)の形式の文と(2)の形式の文の統語の基本構造は同じである。即ち、主語、述語、目的語という要素から成る統語構造を持つ。但し、この場合、述語は接頭辞が任意的な他動詞である点に注意しなければならない。

次に(3)の形式の文を検討しよう。(3)の形式の文においても人称代名詞と接頭辞の *me-* が落とされた動詞形との間に他の要素が挿入されることがある。

(7) Buku ini dia belum baca.^{註(3)}

上の(7)の文は(3)の形式の文である。人称代名詞は dia<彼(彼女)>、接頭辞の me- がつかない動詞形は baca<読む>である。この文において dia と baca との間に belum<まだ～していない>という語がはさまれている。これは、dia と baca が堅い結合関係にあるとは言いきれないことを示している。次例も(3)の形式の文で、人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形との間に他の要素がはさまれている例である(括弧内は後述の引用参考文献の番号とページを示す)。

(8) (a) Surat Anda saya sudah terima.(2 p.6)

(b) Perangko itu kamu ndak beli sendiri?(9 p.103)

(c) Rencana ini saya sudah sampaikan kepada Direktur.(6 p.17)

(d) Menyapu lantai, mengepel, pokoknya apa saja saya akan kerjakan. (11 p.143)

(e) Tapi, apa saja yang Bapak berikan saya mau kerjakan.(11 p.144)

上例について人称代名詞、接頭辞の me- がつかない動詞形、はさまれている要素の順に列挙すれば次の通りである。

(a) saya — terima — sudah

(b) kamu — beli — ndak

(c) saya — sampaikan — sudah

(d) saya — kerjakan — akan

(e) saya — kerjakan — mau

このように(3)の形式の文においても人称代名詞と接頭辞の me- が落とされた動詞形との間に他の要素が挿入されることがあり、比較的 informal なスタイルの口語に見られるのである。従って、(3)の形式の文でも人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形は堅い結合関係にあるとは言いきれない。社会習慣的な言語事実として前掲(5)(b)の文も存在するのである。(3)の形式の文についても受動態論者が説く規則の普遍性には問題があり、独自の形式を備えた文ではないかと考えなければならない。では、(3)の形式の文はどんな統語構造を持つ文であるのか見てみよう。前掲(5)(b)の各文において人称代名詞 saya, Anda, dia と接頭辞の me- がつかない動詞形 baca との間にはさまれた語 sudah は baca を修飾する機能を果たしている。baca は語(他動詞)としての働きをしており、sudah と共に内心構造の動詞句を形成している。(b)の各文において sudah baca<すでに読み終えた>が述語で、人称代名詞が主語である。では、各文の最初の要素 buku itu はどんな機能を果たしているのだろうか。buku itu は目的語の働きをしていると考えられる。これは、インドネシア語が本来的に持つ語順の自由さによって目的語も主語、述語の前にくることが可能であるという事実に基づく。Soenjono Dardjowidjojo 著 Sentence Patterns of Indonesian(1978年刊)の402ページに次のような説明

があり、それを実証している。そこでは、*Saya sudah mendengar kabar itu*.「私はその報道を聞いた」という文について informal なスタイルの口語ではポーズやイントネーションに起因する細やかなニュアンスの差はあるものの、各要素は次のような語順の組みたてができることが示されている。

Kabar itu saya sudah mendengar.

Sudah mendengar saya kabar itu.

Sudah saya mendengar kabar itu.

上例の最初の文では、*kabar itu*<その報道>という目的語が主語 *saya*<私>と述語 *sudah mendengar*<聞いた>の前に置かれて組みたてられている。このように、目的語が主語、述語の前に置かれることもインドネシア語が本来的に語順の自由さを持っていることを示すものである。

そこで、(5)(b)の各文の統語関係を示すと次の通りである。

Buku itu saya sudah baca.
 目的語 主語 述語
 「その本は私が読み終えた。」註(4)

Buku itu Anda sudah baca.
 目的語 主語 述語
 「その本はあなたが読み終えた。」

Buku itu dia sudah baca.
 目的語 主語 述語
 「その本は彼(彼女)が読み終えた。」

一方、(5)(a)の各文の統語関係はどうであろうか。(5)(a)の各文も(b)の各文のように目的語、主語、述語から成る統語の基本構造を持つ。(a)の各文で *baca* を修飾する *sudah* という語が主語である人称代名詞の前に置かれているにすぎない。

ここで再度、注意すべきことは、(5)(a)(b)の各文と(7)の文における *baca* は、前述の通り、接頭辞が任意的な他動詞であるということである。(8)(a)～(e)の文における *terima*<受け取る>、*beli*<買う>、*sampaikan*<伝える>、*kerjakan*<行う>も *baca* と同類の他動詞である。(2)の形式の文の場合と同様に、(3)の形式の文でも接頭辞が任意的な他動詞が用いられる場合、受動態論者が説く規則の普遍性に問題があるのである。(5)(a)(b)の各文と同じように、(7)と(8)(a)～(e)の各文も目的語、主語、述語という要素から成る統語上の基本構造を持つ文である。(7)は *buku ini* が目的語、*dia* が主語、*belum baca* が述語である。談話のレベルにおいて話し手により目的語の *buku itu* がとりたてられて発話される場合、「この本は彼(彼女)が読み終えていない。」と解釈できる。同じように、(8)(a)～(e)の各文について目的語、主語、述語の順に列挙し、日本語の訳例をつければ次の通りである。

(a) surat Anda — saya — sudah terima

「あなたの手紙は私が受け取りました。」

(b) perangko itu — kamu — ndak beli

「その切手は君が自分で買わなかったのか。」

(c) rencana ini — saya — sudah sampaikan

「この計画は私が社長に伝えました。」

(d) menyapu lantai, mengepel, pokoknya apa saja — saya — akan kerjakan

「床を掃くこと、床に雑巾がけをすること、要は何でもいたしましょう。」

(e) apa saja yang Bapak berikan — saya — mau kerjakan

「でも、あなたが与える仕事は何でもしてみたいです。」

(3) の文は、接頭辞が任意的な他動詞 *baca* が *sudah* のような修飾語を欠くだけであるから、その統語構造は *buku itu* が目的語、人称代名詞 *saya*, *Anda*, *dia* が主語、*baca* が述語であるととらえることが可能である。

Buku itu saya baca.

目的語 主語 述語

「その本は私が読んだ。」

Buku itu Anda baca.

目的語 主語 述語

「その本はあなたが読んだ。」

Buku itu dia baca.

目的語 主語 述語

「その本は彼(彼女)が読んだ。」

従って、(3) の形式の文は、目的語、主語、述語という要素から成る統語の基本構造を持つ。但し、この場合、述語に接頭辞が任意的な他動詞が用いられるときである。

以上まとめると、(2)、(3) の文における人称代名詞と接頭辞の *me-* がつかない動詞形が組み合わせられた形式について受動態論者が説く規則の普遍性には問題があるということである。この形式に接頭辞が任意的な他動詞が用いられる場合、問題がある。(2) と (3) の形式の文において *baca* のような接頭辞が任意的な他動詞が用いられる場合は、その他動詞が述語の働きをし、その前方に位置する人称代名詞が主語の働きをするととらえることができる。接頭辞が任意的な他動詞は他動詞性を帯びているが故に目的語を必要とし、その目的語が(2) の形式の文では主語、述語の後、(3) の形式の文では主語、述語の前に位置するととらえるのが自然であろう。改めて(2) と (3) の形式の文において接頭辞が任意的な他動詞が用いられる場合の文の統語上の基本構造を示せば次の通りである。主語になるのは *saya*, *Anda*, *dia* のほか、*aku*, *kami*, *kita*, *engkau*, *kamu*, *beliau*, *mereka* などの人称代名詞である。

(2) の形式の文 主語＋述語＋目的語

(3) の形式の文 目的語＋主語＋述語

(2) と (3) の形式の文に接頭辞が任意的でない他動詞が用いられる場合はどうであろうか。ここでいう接頭辞が任意的でない他動詞とは、(mem) baca のような接頭辞が任意的な他動詞とは対照的に接頭辞が必然的に付せられて用いられる他動詞のことである。menetik<タイプをうつ>、mengapur<石灰を塗る>、mengepel<床に雑巾をかける>、mengecat<ペンキを塗る>のような種類の動詞である。

Saya ketik surat itu.

「私がタイプする、その書類は (その書類は私がタイプする)。」

Surat itu saya ketik.

「その書類は私がタイプする。」

menetikから接頭辞の me- をとった形の ketik は、前に位置する人称代名詞 (行為者の働きをする) と結びついて動詞句を形成する。上例の統語関係は、saya ketik<私がタイプをうつ>が述語、その主語が surat itu<その書類>であると考えられるが、(2) と (3) の形式の文に接頭辞が任意的でない他動詞が用いられる場合の詳しい検討は別稿に譲ることにしたい。

おわりに

既に明らかな通り、生成文法の変換操作によって導かれる受動態形式の規則性には問題がある。人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形が組み合わされた形式は、受動態論者の意見によれば堅い結合関係にあるとされ、その間に他の要素がはさまればよくないとされる。そして、受動態論者はこの規則をあまねく通用させるのである。しかしながら、この規則を普遍的に通用させたのでは社会習慣的な言語事実に合わず、疑問が残るのである。明らかなことは、文法があって言語事実があるのではない。言語というものは、文法が先にあってそれによって生み出されたものではない。まず先に、社会習慣的に用いられる言語が存在する。この言語を観察し、見出された法則が文法である。

本稿では、人称代名詞と接頭辞の me- がつかない動詞形が組み合わされた形式において接頭辞が任意的な他動詞が用いられる場合の検討を行ったが、この種の動詞以外の他動詞が用いられる場合はいかなるものか、その検討は別稿に譲ることにしたい。

註

- (1) インドネシア語に能動態、受動態の区別を認める意見には、例えば S. Takdir Alisjahbana(1974), Sutan Muhammad Zain(1954), Dr. Slametmuljana(1969), Drs. Li Chuan Siu(1976), Soenjono Dardjowidjojo(1978), A. M. Almatsier(1983), Amin Singgih(1984), S. Soebardi(1973), Yohanni Johns(1976), J.P. Sarumpaet & J.A.C. Mackie(1966) などがある。(1)形式の文で③の dia のように主語が第三人称の場合、(2)⑥と(3)⑨の文のほか、接頭辞の di- を用いた形式の文も派生文としてとらえられる。即ち、(2)では⑥のほか、次の文も派生文としてとらえられる。

Dibacanya buku itu.

(3) では⑨のほか、次の文も派生文としてとらえられる。

Buku itu dibacanya.

(2) Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia. 1988. *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Jakarta: Balai Pustaka. P.79 から引用。

(3) Amran Halim. 1984. *Intonasi*. Jakarta: Djambatan. p.126 から引用。

(4) 談話のレベルにおいて、話し手により目的語の buku itu の部分がとりたてられる場合と指定される場合とがあり、これらはイントネーションで示される。イントネーションの標示を Amran Halim 著「イントネーション」(1984年刊)の中の標示に従い、イントネーションの高・中・低を3・2・1、ポーズを斜線で示すと、とりたてられる場合は次のようになる。

2——— 33 2——— 31
Buku itu/saya sudah baca.
「その本は私が読み終えた。」

指定される場合は次のようになる。

2——— 32 2——— 11
Buku itu/saya sudah baca.
「その本を私が読み終えた。」

このように、統語上、目的語が主語、述語の前にくる(3)の形式では、談話のレベルで話し手により目的語の部分がとりたてられたり、指定されたりする。以下、(3)形式のインドネシア語文の日本語訳は、目的語の部分がとりたてられる場合の訳をつけた。

主要参考文献

1. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia. 1988. *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Jakarta: Balai Pustaka.
2. Abdul Chaer. 1988. *Tata Bahasa Praktis Bahasa Indonesia*. Jakarta: Bhratarata.
3. E. Zaenal Arifin. 1987. *Berbahasa Indonesialah dengan Benar*. Jakarta: MSP.
4. John U. Wolff, Dede Oetomo, Daniel Fietkiewicz. 1987. *Beginning Indonesian through Self-Instruction*. Book 2. Jakarta: PT Gramedia.
5. ドミニクス・バタオネ, 近藤由美. 1989. 「バタオネのインドネシア語講座」. 東京: めこん.
6. Drs. E. Zaenal Arifin, Drs. S. Amran Tasai. 1988. *Cermat Berbahasa Indonesia*. Jakarta: MSP.
7. Amran Halim. 1984. *Intonasi*. Jakarta: Djambatan.
8. Dendy Sugono. 1986. *Berbahasa Indonesia dengan Benar*. Jakarta.
9. John U. Wolff. 1978. *Indonesian Conversations*. New York: Cornell University.
10. John U. Wolff. 1980. *Beginning Indonesian*. Part One. Second Edition. New York: Cornell University Press.
11. John U. Wolff. 1979. *Beginning Indonesian*. Part Two. Second Edition. New York: Cornell University Press.
12. Drs. Li Chuan Siu. 1976. *Essentials of Indonesian Grammar*. Sydney: Pustaka Malindo.
13. S. Takdir Alisjahbana. 1974. *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia*. Jilid II. Cetakan ke-27. Jakarta: Dian Rakyat.
14. Sutan Muhammad Zain. 1954. *Djalan Bahasa Indonesia*. Cetakan ke-9. Djakarta: Dharma.
15. Madong Lubis. 1954. *Paramasastera Landjut*. Tjetakan ke-5. Amsterdam-Djakarta: W. Versluys.
16. Dr. Slametmuljana. 1969. *Kaidah Bahasa Indonesia*. Ende-Flores: Nusa Indah.

17. Soenjono Dardjowidjojo. 1978. *Sentence Patterns of Indonesian*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
18. A.M. Almatsier. 1983. *Efficient Bahasa Indonesia*. Jakarta: Mutiara.
19. Amin Singgih. 1984. *Belajar Bahasa Indonesia Tanpa Guru*. Cetakan ke-5. Jakarta: Erlangga.
20. S. Soebardi. 1973. *Learn Bahasa Indonesia*. Book 2. Jakarta: Bhratara.
21. Yohanni Johns. 1976. *Bahasa Indonesia*. Canberra: Australian National University.
22. J.P.Sarumpaet & J.A.C.Mackie. 1966. *Introduction To Bahasa Indonesia*. Melbourne: Melbourne University Press.
23. Macdonald & Soenjono. 1967. *Indonesian Reference Grammar*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

(1991. 9. 11 受理)